

## 「戦時下における児童文化」について(その一六)

―「少國民新聞」(東日版)における読者投稿作品の位相と展開(四)―

熊 木 哲

「少國民新聞」(東日版・東京日日新聞社発行)は、「東日小学生新聞」の改題であるが、「小学校が明春から国民学校となるので、それに応じてわが東日小学生新聞も『少國民新聞』と改題することになりました」(「東日小学生新聞」昭和十五年十二月十二日)というもの。「尋常小学校」が「国民学校」になるのは、昭和十六年四月からであったが、「東日小学生新聞」は、十六年元旦から改題し「少國民新聞」(東日版)(以下、「少國民新聞」と記載)となった。

前稿(「戦時下における児童文化」について(その一五))、「大妻女子大学紀要・文系」第四十二号、平成二十二年(二〇一〇)三月)では、「少國民新聞」の昭和十六年に掲載された「詩」を検討した。

以下、本稿では、「少國民新聞」に掲載された、昭和十六年の「短歌」を四半期毎に検討する。

引用に際しては、原則として、旧字体を新字体に改め、改行も適宜改めた。

前稿同様、作者については、在籍校名・在学年・性別を記すにとどめた。在学年次のうち「高一」「高二」は高等科一年、二年を示す。

### 一 昭和十六年の「短歌」作品の展開

前稿でも記したが、「少國民新聞」に改題された昭和十六年には、「東日小学生新聞」では設定されていた「紙上作品展覧会」あるいは「紙上作品展」の紙面構成は、見られなかった。

昭和十六年の検討対象は、前稿同様、一月一日(水・第一三三三三三三)から十二月三十一日(水・第一六四一)までの、休刊日を除いた三〇九日分であるが、国会図書館蔵「少國民新聞」は、一月二十二日(水・第一三四九号)のマイクロフィルムが「欠」であり、検討対象は三〇八日分であった。

この間の掲載状態は、原則として、「東日小学生新聞」と同様、毎週月曜日が休刊日であり、火曜日から日曜日まで、「綴方」「詩」「短歌」「俳句」「書方」「図画」の総てか、或いは、その一部が掲載されていた。

紙面構成も、「東日小学生新聞」と同様、平日・土曜日が四面、日曜日が八面構成であったが、第四四半期になると、「お国への御奉公」(「少國民新聞」十月七日)のため、用紙を節約するところとなり、十月九日から週一回(木)、十一月五日から週二回(水・金)、十二月九日からは週三回(火・木・土)が二面構成となった。二面構成では十五日

分で作品の掲載は無かった。

以上、前々稿、昭和十六年の「俳句」及び前稿「詩」に記載した作品の紙面掲載状況であり、本稿においても、その状況に変わりはないが、第二四半期の六月には、「短歌」作品の掲載は無かった。

昭和十六年、「短歌」の掲載数は一六六作品。

内訳は、第一四半期が四六作品。

第二四半期が二〇作品。

第三四半期が六二作品。

第四四半期が三八作品。

昭和十六年に掲載された「短歌」一六六作品のうち、作品内容に「戦時下」色に見えるのは三八作品（約二二・九％）。

内訳は、第一四半期では四六作品中一三（約二八・三％）。

第二四半期では二〇作品中五（二五・〇％）。

第三四半期では六二作品中一三（約二一・〇％）。

第四四半期では三八作品中七（約一八・四％）。

第二四半期の掲載数が少ないのは、六月に「短歌」の掲載がなかったことによるものであり、少ない掲載数のうち、時局柄の内容が少なくなかったことになる。

一方、第四四半期は、紙面構成が減少するといった状況の中での掲載数であり、「大東亜戦争」の開戦といった、「戦時下」の一大転換期を迎えた状況からは、時局柄を内容とする作品が多くはなかったことになる。

因みに、「東日小学生新聞」の発行された昭和十二年から十六年における「短歌」作品の内容に「戦時下」色或は時局柄を内容とする作品は、次のようになる。

昭和十二年は、七七作品中一五（約一九・五％）

昭和十三年は、一九四作品中五一（約二六・三％）

昭和十四年は、一二七作品中三七（約二九・一％）。

昭和十五年は、三二三作品中八二（約二五・四％）。

昭和十六年は、一六六作品中三八（約二二・九％）。

十六年の「短歌」は、掲載数が前年十六年のほぼ半減となり、「戦時下」を内容とする作品の掲載率は二・五％減少し、昭和十二年に次いで低い掲載率となった。

掲載数が、前年比で、ほぼ半減したのは、第二四半期の六月に作品の掲載が無かったことと、第四四半期の用紙節約による二面構成日において、十五日分で「短歌」を含む総ての作品の掲載が無かったことによる影響とも推測できる。

一方、「戦時下」を内容とする作品の掲載率が減少したということは、「綴方」が三〇・七％と十五年を一〇％以上も増大し、「俳句」がほぼ同率であったことを考え合わせると、前稿で検討した「詩」作品における減少傾向とともに、「短歌」での減少傾向は特徴的であったといえるよう。

なお、十六年一年間に、複数の「短歌」作品が掲載された児童は、最多は三首で一名、二首が一八名であった。

また、同じ在籍校で、一年間に九首掲載されたのが、北海道中立牛校。高等科一年が五首四名、同二年が四首四名であり、突出している。

九首のうち、「戦時下」色を内容とする作品は一首であり、「短歌」の投稿が高等科の教育方針の一つであったということであろうか。

以下、四半期毎に検討するが、都合上、内容に「戦時下」色に見える作品に第一四半期から第四四半期まで整理番号を付す。

## 二 昭和十六年第一四半期における「短歌」

第一四半期（二月～三月）に掲載された「短歌」は四六首。

この内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、次の一三首であり、掲載作品に占める掲載率は約二八・三％となる。

1 令状を握りて叔父はひとり言やつて来るぞとつばやきにけり

- 2 大君にわが兄召され行く道をわれもしつかり踏みしめるなり  
(神奈川県茅ヶ崎第三校六年男子、一月十日・金、第一三三九号)
- 3 するく〜と今し昇れる日の御旗緑に映えて雄々しさぞ見ゆ  
(北海道函館師範附属校高二男子、一月十五日・水、第一三四三号)
- 4 皆寝て又出して見る軍事便戦地を偲びつ床につきけり  
(栃木県柏尾第一校高二女子、一月二十九日・水、第一三五五号)
- 5 便り書く心はうれし兄上の喜び読める姿をがげば  
(栃木県柏尾第一校高二女子、二月一日・土、第一三五八号)
- 6 つはものが今日も出て行く村の駅心をこめて旗を打ちふる  
(福島県新鶴第一校六年男子、三月一日・土、第一三八二号)
- 7 満洲の兄をしのびて今宵また寒さ忘れて靴下をあむ  
(千葉県東大戸校六年女子、三月四日・火、第一三八四号)
- 8 戦場の兄の手紙のひとところ泥にこすれて着きぬこの朝  
(千葉県東大戸校六年女子、三月五日・水、第一三八五号)
- 9 高々と飛ぶ荒鷲の勇ましく僕等の空を守る飛行士  
(長野県須坂校四年男子、三月六日・木、第一三八六号)
- 10 日の丸をちぎれる程にふりたてて送る歓呼は山にとゞろく  
(新潟県岡野校高二男子、三月七日・金、第一三八七号)
- 11 かすかなる物の音にも耳立てて立ちつ座りつ父を待ちけり  
(宮城県新田校高二男子、三月十二日・水、第一三九一号)
- 12 戦地から手紙来たので家内中さきをあらそひ玄関へ出る  
(東京市淀橋区戸山校三年男子、同前)
- 13 遺品展拝して行けばおのづから燃ゆるものありわが胸のうちに  
(茨城県長讀校六年男子、三月十三日・木、第一三九二号)

第一首「令状を」は、召集令状を受取った叔父が、決意を「ひとり言」したのを、児童が聞き取ったということ。

第二首「大君に」は、召集令状を受取った兄の入営日の作品。「兄召

「戦時下における児童文化」について(その一六)

され行く道」を自分も「しつかり踏みしめる」というもの。入営は、「大君」に召されるという認識を六年生が持っているということだ。第一首と第二首の掲載事情は不明であるが、掲載は一月八日と十日と接近している。山形県(第一首)に、神奈川県(第二首)にと、召集令状が届き、入営していったということになる。

第六首「つはものが」と第一〇首「日の丸を」も入営を内容とする作品。第一首、第二首が身内の「叔父」や「兄」の入営であったが、第六首・第一〇首には、村から入営する「つはもの」を駅で見送る児童たちがいる。入営の見送りは、児童に課された役割であった。

軍隊に召集された兵士は、戦場へと出征していく。

第四首「皆寝て」、第八首「戦場の」、第一二首「戦地から」の三作品は、「戦地」からの「軍事便」が届いたもの。

第四首は、寝る前に留守家族「皆」で一度読んだ「軍事便」だが、「皆寝て」しまった後、「又出して」、一人心ゆくまで読んでみる児童がいる。

第八首の「手紙」は、「戦場の兄」からだ。「ひとところ泥にこすれて」いたことが、その手紙の到着までの経緯を推測させる作品だ。

第一二首は、「戦地から手紙」が届いたことで、「家内中」が「さきをあらそひ玄関へ出る」もので、児童もその一人だ。配達夫が、差出人の名前を知らせたということか。

「軍事便」は、戦地からの便りであるが、「内地」からは、留守族が、慰問文を送り、慰問品を送った。

第五首「便り書く」は、兵隊となっている「兄上」が家族からの手紙を「喜び読める姿」を思い描いて認めている児童がいる。第四首の作者と同じ在籍校・学年であるが、別人。

第七首「満洲の」では、「兄」に送る「靴下をあむ」児童がいる。「今宵また寒さ忘れて靴下をあむ」のであり、何足も編んでいる様子が詠み込まれている。「満洲の兄」の寒さが思い遣られ、「今宵また」靴下を編むということだ。この児童は、第八首、戦場の兄からの手紙が

一とこころ泥にこすれて家に着いたと詠んだ同じ作者。第七首と第八首の掲載は、三月四日と五日であり、掲載事情は不明ながら、作者から兄への慰問文、慰問品の発送が度々であったことが推測される。

第一首「かすかなる」は、戦地から帰還の父を、今か今かと待っている児童の心境。日常、父と一緒に暮している状況であれば、単に外出している父をこのように心待ちすることは考えにくい。

第一三首「遺品展」は、戦死した兵士の遺品展示の見学。地域から出征し戦死した兵士の顕彰のために設けられた「遺品展」。児童が眼にしたものは明らかではないが、「燃ゆるもの」が「わが胸のうちに」湧いたという事。戦死することが美談として展示され、それを見る児童に覚悟を醸成したということか。

第三首「するく」と昇る「日の御旗」は、国旗が掲揚される風景。掲載日から推測するに、新年の行事での掲揚か。掲揚される日の丸に「雄々しさぞ見ゆ」が時局柄だ。

第九首「高々と」飛んでゆくのは「荒鷲」。訓練飛行でもあったか。眼に見える戦時下ということだ。

第一四半期における「短歌」の戦時下は、出征する肉親があり、隣組みのおじさんたちの出征があった。既に戦場にあり、便りを心待ちにしている戦地と留守宅。戦場からの便りが、生きている証だ。それでも、戦死はある。遺品が留守宅に届き、地域では、そうした遺品を集めて展示する。展示に値するほどの遺品の数ということであり、この地域には数多くの戦死者がたということでもある。

一方、第一四半期の「短歌」は、四六首であり、戦時下色を内容とする作品が一二首あるものの、残りの三三首は、児童の身の回りの日常を内容とする。

雪降ればもう見られぬと黒き土強くにぎれば冷たかりけり

(山形県一条校高一男子、一月七日・火、第一三三六号)

雪の季節がそこまで来ているという実感は、手のひらにあるという

こと。季節を触覚で掴んで見せている。

夜も更けて雪の音さへ静かなり看りつかれていつか眠りぬ

(秋田県浅舞校六年男子、一月四日・土、第一三三四号)

雪の季節。夜半、雪は降り続けているようだが、家族の看病であろうか、つい眠ってしまった。

雪晴の寒き朝を訓練すと引出す馬の猛り激しも

(岩手県徳田校高一男子、二月二十三日・日、第一三七七号)

雪が積もっている中、馬の訓練にあたる高等科一年は、この家にとつて、立派な働き手だ。

さらくくと天神さまの森の中白いきれいな雪はふるかな

(東京市中野区桃園第三校三年男子、三月十二日・水、第一三九一号)

掲載日から推測すると、東京の雪は遅いという事か。時局柄から推測すれば、三年生の児童は、「天神さま」に武運長久のお参りにでも行ったか。ただ、作者が三年生であることには、その豊かな才能にただ驚くのみ。

いつしかにわが村里は春めきて雑木林の色青み行く

(茨城県戸多校高一男子、三月五日・水、第一三八五号)

記念樹の松も緑の色増して学校の庭に春の訪れ

(岩手県荒屋校五年男子、三月六日・木、第一三八六号)

掲載は三月初旬。茨城に岩手に、春の季節がやって来たということだ。児童の眼差しは、木々に注がれ、季節の移り変わりを色彩に見て取った。

畦づたひ杖をたよりに麦踏めり富士に雲なき日曜日の午後

(山梨県増穂校高一男子、三月一日・土、第一三八二号)

日曜日午後の縁側はがらかに眺め居るなり澄渡る空を

(栃木県小俣校六年男子、同前)

同日掲載で、同じ日曜日を内容とする作品だが、その内容は、前者が「麦踏」と、農作業で活動的な日曜日であるのに対して、後者は、澄渡っている空を「はがらかに」眺めているという静かな日曜日だ。

同日掲載ということからは、ほぼ同年齢の男子児童の日曜日の姿として、編集者の意図が透けて見えよう。

以上、昭和十六年第一四半期の「短歌」を検討してきた。

掲載された四三首のうち一三首が戦時下色を内容とするものであり、掲載率からは約二八・三%となり、ほぼ三割にのぼる。

その内容も、掲載された児童の身内に、戦死者は無かったものの、地域では、展示できるほど戦死者の「遺品」が集められていた。

やがて「遺品」を残すことになるかもしれない入営や出征は、身内にも集落にもあった。もともと「遺品」に近いのは、戦場に居る肉親だ。

児童にとって、戦時下は、もはや日常ということだが、「短歌」作品には、季節を感覚で捉える児童がおり、日曜日を働いて過ごす一方では、日向ぼっこで過ごす児童もいた。前者は、戦時下ゆえの働き手として児童に期待された農作業であったともいえるが、戦時下にあっても日曜日を「ほがらかに」過ごす児童もあったということになる。

### 三 昭和十六年第二四半期における「短歌」

第二四半期（四月～六月）に掲載された「短歌」は二〇首。掲載された作品が少ないのは、六月には、「短歌」が全く掲載されていないからであり、その理由は詳らかではない。

二〇作品中、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、次の五首であり、掲載作品に占める掲載率は二五・〇%となる。

14 君のため散りて帰らぬ師の君の御魂に恥ぢぬをのことならん

（茨城県若松市若松高小校二年男子、四月一日・火、第一四〇八号）

15 そのあした見返すごとくわれを見し父の瞳を今も忘れず

（岩手県徳田校高二男子、同前）

16 火の気なき火鉢に寄りし父上は戦地の兄の名を灰に書く

「戦時下における児童文化」について（その一六）

（青森県是川校高二男子、四月二日・水、第一四〇九号）

17 神国に生まれし今日の喜びを父に告げなん靖国の宮

（東京市浅草区待乳山校五年男子、四月三日・木、第一四一〇号）

18 戦地征く父を思ひて夜もすがら月の光を仰ぎ見るかな

（千葉県大戸校六年男子、四月十一日・金、第一四一六号）

第一四首「君のため」には、応召後、戦死した「師の君」、すなわち、恩師がいたということ。「御魂に恥ぢぬをのことならん」は、葬儀で「御魂」に対する約束であったか。高等科一年の児童も、戦死者の葬儀に列席したということであり、その戦死者が「恩師」であったということ。

第一五首「そのあした」は、父の出征した日のこと。その日、自分に後を託した「父の瞳」を忘れられないというもの。作者は、父の消息に思いを馳せている。

第一六首「火の気なき」は、戦地に居る息子の消息を思いやる父親を見ている児童がいるということ。父は、火鉢の灰に「兄の名」を書いている。作者の児童が、その様子を見ていたということ。児童には、戦地に兄がいるということであり、児童の戦時下は、肉親が戦場に居るということ。

第一七首「神国」は、作者が「靖国の宮」に参拝したことが内容。父は戦死し、靖国神社に祭られているということであり、児童の戦時下は、父親が戦死しているということだ。

第一八首「戦地征く」では、父が戦場に居るということ。「月の光を仰ぎ見る」児童は、父のことが心配でならない。自分が見上げている月を、戦場に居る父も見ていることを願っていることか。

第二四半期の「短歌」作品の掲載は、六月に掲載のないこともあって二〇首であるが、その内、戦時下を内容とする作品は五首。

この五首には、児童の直面している戦時下がある。兄や父が出征中であり、父が戦死していた。自分の恩師が戦死した児童もいたことに

なる。

一方、第二四半期に掲載された「短歌」二〇首のうち、戦時下色を内容とする五首以外の一五首は、児童の身の回りの日常を内容とする作品である。

わが家の箱にしまひし枯露柿に白きこふきぬ指の跡のこして

(山梨県増穂校高一男子、四月二日・水、第一四〇八号)

秋に渋柿をむいて干し上げた枯露柿。保存のため箱にしまっておいた。食べごろかと蓋を開けてみると、見事な「白きこ」がふいていたが、誰かが、自分より先につまんで、出来具合を確かめたようだ。「指の跡」を見て、作者は、誰の指がわかつたのだろう。

ぼん／＼とピアノの音がさえわたり若葉がゆれてる春の夕ぐれ

(秋田県横手女子校六年女子、同前)

「わが家の」と「ぼん／＼」は、第一六首「火の気なき」と同日の掲載。火の気のない火鉢の灰に、出征中の息子の名前を書いている父親がいる一方で、「ピアノの音がさえわたり若葉がゆれてる春の夕ぐれ」のなかにいる少女がいるということ。「ピアノ」は、作者が弾いているのか、作者は聞いているのか分明ではないが、ここには、穏やかな「春の夕ぐれ」に包まれていく児童がいる。

梅の花ぼつ／＼咲きぬ朝ごとに歯を磨きつゝ、数へ楽しむ

(宮城県中津山校五年女子、四月三日・木、第一四一〇号)

第一七首「神国に」と同日の掲載。「靖国の宮」に参拝し、祭られている父に「神国に生まれし」喜びを伝えたいとする児童の一方で、冬から春への季節の変わり目を「楽しむ」児童がいるということだ。

雪はれて風なき空は澄みきつてほんのり上る汽船の煙

(北海道寿都校五年男子、四月十一日・金、第一四一六号)

第一八首「戦地征く」と同日の掲載。北海道の春は遅いということか。「戦地征く」で作者の児童が眺めていたのは、「月の光」であったが、ここでは、降っていた雪がやみ、風もない空に「ほんのり上る汽

船の煙」を眺めているということ。夜と昼の対象的な風景は、それぞれの児童の心象風景ということか。

い、下駄をはいたをさな児嬉しさう下を向き／＼庭をかけ足

(茨城県峯崎第一校六年男子、同前)

これも第一八首「戦地征く」と同日の掲載。「い、下駄」とは、新しい下駄ということであろうが、「をさな児」が嬉しさを隠しきれずに下駄を見い見いしながら「かけ足」をしている。「をさな児」は、弟であろうか、それを微笑ましく見つめているのが作者ということになる。

しと／＼と降る春雨にぬれて行く野良犬のかけあわれなりけり

(東京市青山師範附属校四年女子、五月二十五日・日、第一四五四号)

「春雨」の中、雨宿りすることもなく「ぬれて行く野良犬」を見ての作品であろうが、作者は、「あわれなりけり」と同情の眼でみているということ。

以上、昭和十六年第二四半期の「短歌」を検討してきた。

掲載された二〇首のうち五首が戦時下色を内容とするものであり、掲載率からは二五・〇%となり、第一四半期の約二八・三%には及ばないものの、低くはない掲載率となった。

その内容も、第一四半期には、掲載された児童に身内の戦死は無かったが、この第二四半期では、兄や父が出征中であり、父が戦死していた。ここには、児童の直面している戦時下があった。

一方、第二四半期は春から初夏を季節とし、各地毎の季節を取り込み、幼子をまなざす視線や人の庇護のない野良犬に同情する作品もみえ、児童は、日々の生活風景も作品に取り込んでいたということは、これまでと同様であった。

### 三 昭和十六年第三四半期における「短歌」

第三四半期（七月～九月）に掲載された「短歌」は六二首。

この内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、次の二三首であり、掲載作品に占める掲載率は約二一・〇%となる。

- 19 ま、ごとに余念なかりしをみな子もその手休めて飛行機を見る  
(長野県南牧校五年女子、七月十六日・水、第一四九八号)
- 20 風やんですつきり晴れた夏空にプロペラの音気持よきかな  
(千葉県大原校高一男子、八月六日・水、第一五二六号)
- 21 しとくと雨ふる中に麦を刈る先生も友も皆だまつて  
(千葉県豊岡校高一男子、八月十日・日、第一五二〇号)
- 22 わが村を一声高くないで召されし軍馬今日も征くなり  
(新潟県聖籠校六年男子、八月十二日・火、第一五二二号)
- 23 出征の吾が子見送る母の顔雨にぬれつ、ほのかに赤し  
(岩手県大槌校高一男子、八月十三日・水、第一五二二号)
- 24 勤労奉仕に疲れたからだ休めつ、戦地の兵を思ふ夏空  
(北海道中立牛校高一男子、八月十七日・日、第一五二六号)
- 25 プロペラの音勇ましく飛行機の青空高く飛べる夏の日  
(山形県小松校高一男子、八月二十四日・日、第一五三二号)
- 26 乾してある茶がらひる間もあらずしてかびのはえたり七月の雨  
(山形県清川校五年男子、八月二十六日・火、第一五三三号)
- 27 歌できぬ我のかなしさうしろむき東亜の地図をしぼしながめる  
(岩手県大槌校高一男子、九月十日・水、第一五四六号)
- 28 こ、ろよき爆音たてて飛行機は三機三機の列を乱さず  
(北海道月寒校高一男子、九月十一日・木、第一五四七号)
- 29 故郷の便りまちつつ戦死せし兵ありと聞けば悲しかりけり  
(宮城県細倉校六年男子、九月十六日・火、第一五五一号)
- 30 勤労の学生隊の手伝ひしたんばの稲穂出そろひにけり  
(福島県須釜校高二男子、九月二十六日・金、第一五六〇号)
- 31 鉄とりて今東北の土にたつこの身も鉄も私ならず  
(福島県須釜校高二男子、九月二十七日・土、第一五六二号)

「戦時下における児童文化」について(その一六)

第一九、二〇、二五、二八首は、いずれも飛行機を内容とする作品。第一九首「ま、ごとに」は、飛んできた飛行機に気を取られて、マゴトを中断して空を見上げる「をみな子」を、作者の児童が見つけているということ。

第二〇首「風やんで」は、「すつきり晴れた夏空」を飛ぶ飛行機を見上げているが、途切れることのないプロペラの音に気持ちは向かつている。

第二五首「プロペラの」は、前作品と同じ「音」を内容としながら、こちらはその音に「勇ましき」を感じている。

第二八首「こ、ろよき」も、飛行機のエンジンの音だが、こちらは「爆音」。整然と編隊を組んで飛んで行く飛行機を作者が眺めているということ。

この第三四半期の「詩」に、「飛行機」と題した、次の作品があった。

ごうつと プロペラの音。

すぐ上に 飛行機三機、

へんたいで とんでゐる。

時々銀翼が ぴかりと光る、

日の丸が くつきりと

ういてゐる。

七月二十四日(木・第一五〇五号)に掲載された宮城県若柳校五年男子の作品だ。児童の頭の上を、編隊を組んだ「飛行機」が、飛んで行く。「日の丸がくつきりと」浮いて見えるほどの高さだった、というもの。

第一九首は長野県、第二〇首は千葉県、第二五首は山形県、第二八首は北海道。そして、「詩」では宮城県。日本の各地を飛行機が飛び、それを児童は見上げていた。これらの飛行機は、言うまでもなく、遊

覧飛行ではない。空の戦いに備えて飛ぶ飛行機であり、そうした空の下が、児童の日常生活の場であったということである。

第二一首「しとく」と、第二四首「勤勞奉仕に」、第三〇首「勤勞の」、第三二首「鎌とりて」は、勤勞奉仕が題材となった作品。

第二一首「しとく」とは、「先生も友も皆だまつて」麦を刈っているというものであるが、それは「しとく」と雨ふる中」での作業だった。雨の中の麦刈りは、快いものではなからう。刈り取った麦の品質にも影響がでようが、「雨ふる中に麦を刈る」必要があったということであろう。この校区には、他にも麦刈りに子供たちの勤勞奉仕を必要としている出征遺家族があり、天候に左右されられない事情があったということが推測される。

第二四首「勤勞奉仕に」は、作業休みの見上げた「夏空」に「戦地の兵を思ふ」というもの。作業が辛い時、「戦地の兵」の辛さを思へと教え込まれていたということか。

第三〇首「勤勞の」と、第三二首「鎌とりて」は、同じ作者。

第三〇首「勤勞の」は、「学生隊」が「手伝ひしたんぼ」の稲に穂が出揃ったというもの。田植えに、除草にと、勤勞奉仕した「たんぼ」の稲が生長している様子である。作者も「学生隊」と共に勤勞奉仕に加わったということであろうか。それとも、遺家族として、勤勞奉仕を受けた側であったか。

第三一首「鎌とりて」は、「この身も鎌も私ならず」が主眼。鎌を持つて耕すのは、自分のためではなく、お国のためだということか。前作と同じ作者であるが、作者が、勤勞隊の一員として鎌を持っているのか、勤勞奉仕を受ける家族として、自分が働くことは、自分の家族の為ではなく、お国への報国だとの決意か、あきらかではない。いずれにしても、鎌を持って耕す児童が、その勤勞の中で詠んだ作品である。

第二二首「わが村を」は、軍馬の出征であり、それを見送る児童がいるということ。「今日も征くなり」からは、軍馬の出征をこれまでも

見送ったということ。人のみならず、馬もまた、戦場へと狩り立てられていった。

第三三首「出征の」は、雨の日に、召集令状によって入営していく「吾が子」を見送る「母」を詠んだ作品。「母の顔」は、雨にぬれていても「ほのかに赤し」。顔がぬれているのは、雨のせいかな涙のせいかな。雨が涙をかくしているのか。作者とこの母との関係は不明だが、児童は、「母の顔」の「赤し」を見て取ったということ。雨の中での入営見送りも児童の果たすべき役割だったということ。

第二六首「乾してある」は、「茶がら」を乾してみたものの、「七月の雨」のせいで、乾かすにかびがはえてしまったというもの。

愛国婦人会所属の愛国子女団では、かねてから軍馬の飼料に栄養価のあるお茶殻を献納していましたが、こんどはやはり物資不足で飼料に困つてゐる動物園にも、お茶殻を献納しませうと、まづ上野動物園で実地に試験していたところ、鹿、河馬、兎、そのほか様々の動物や馬類も、大好物だといふことがわかりました。

「少國民新聞」昭和十六年二月十二日（第一三六七号）第二面に掲載された「上野動物園へお茶殻慰問隊」の一節である。

お茶殻は、「かねてから軍馬の飼料」として献納されてたが、物資不足から動物園へも飼料として献納するという記事。

第二六首は、八月二十六日の掲載であるが、九月十八日の「少國民新聞」（第一五五三号）二面には、次のような記事が掲載された。

お茶殻献納は、一部では前から実行して来ましたが、来月末から全国で始めることになりました。今までは軍馬や動物園にさし出したのですが、今度からは全国の馬の飼主にわたし、一般の馬に御馳走するはずであります。お茶殻には蛋白や脂肪がたくさん



含まれてゐて、大たい大麦と同じ程ねうちがあります。一人一年百三十匁のお茶を使ふとして、一年間に全国では五百三十六貫目になります。最初はお茶殻などいくらもたまるものないと思われたものでしたが、実験により、りっぱに役立つことがわかりました。集め方は馬政局が指導し、帝国馬匹協会と婦人団体協力のものとに、隣組や町会等から集める予定日を各家庭に通知します。当日は婦人団体がとり集めて市役所や区役所、各国民学校等、区内数箇所での配給所に持ち寄ります。役所や会社、ホテル、百貨店等では、まとめて配給所へ持ちこみます。配給所では各府県の畜産組合に、切符制で集つたお茶殻を配給し、組合員の馬の飼主に渡します。飼主はお茶殻一貫匁につき三十銭の割で、婦人団体にお礼することになつてゐます。

お茶殻集めは、「馬政局が指導し、帝国馬匹協会と婦人団体協力のもとに、隣組や町会等から集める」ことになり、その予定日が各家庭に周知される体制が作られていった。

この記事では、「来月末から全国で始める」とあるが、十月三十一日の「少国民新聞」(第一五八九)二面に、「お茶殻を馬に 全国に新しい運動」の見出しと馬の顔の写真に「茶殻がそのま、 だいたい馬糧」の標語を添えたポスターの写真とともに、次のような記事が掲載された。

馬もためぬ家は茶殻で御奉公

前線や銃後でお国のために働いてゐる馬君たちに、大好きな茶殻をやりませうといふ「茶殻馬糧化報国運動」が、十一月から全国にかけてはじまります。このうれしい運動は、農林省馬政局の指導で帝国馬匹協会主催、本社後援で行なはれます。皆さんも、力を合はせて、馬君をふとらせてやつて下さい。

「戦時下における児童文化」について(その一六)

馬の飼料不足への対応として、出がらしの茶殻までもが政府の指導のもと、「茶殻馬糧化報国運動」として組織化されていくことになったということであるが、第二六首は、お茶殻集めが、「報国運動」として組織化される以前から実施されていたことを背景とする作品ということになる。

第二九首「歌できぬ」の戦時下は、教室の後の壁にはつてある「東亜の地図」。作者は、短歌を作っている最中。思い浮かばないので、気分転換に後を見たところ、「東亜の地図」が目に入り、「しばしながめる」もので、作者が眺めた「東亜の地図」には、日本軍の進軍の様子が書き込まれていたものか。

第三〇首「故郷の」で、作者に、「便りまちつつ戦死せし兵あり」と聞かせたのは、誰であったか。戦場からの帰還兵が、作者に慰問文の礼と共に伝えたものか。あるいは、教師から慰問文を送る意図の中で児童に伝えられたものか。「便り」は、戦場と故郷を結ぶもの、兵士と家族とを結ぶものであったということだ。

第三四半期の「短歌」作品の掲載は、六二作品。その内、戦時下を内容とする作品は一三首(約二一・〇%)。

ここには、第二四半期に見られた投稿児童の肉親の戦死を内容とする作品はみられない。第三三首「出征の吾が子見送る母」についても、作品からは投稿児童の母親と断定することはできない。

「軍馬」の出征もあったが、この「軍馬」も地域で飼育されていた可能性はあるものの、投稿児童の家の馬とは断定できない。

この一三首での題材として四首にとられたのは、飛行機。機体やプロペラの音が取り上げられ、児童は、視覚的に聴覚的に捉えてみせた。

また、第三四半期が農繁期ということもあって、勤労奉仕にまつわる作品も見られたが、児童は、労働力として農作業の一翼を担う存在として期待されていたということである。

一方、第三四半期に掲載された「短歌」六二首のうち、戦時下色を

内容とする一三首以外でも、「勤勞奉仕」といった国策ではなく、一家の働き手として、日常生活を送っていた。

開墾の野火もえゆきて夏山はうち沈みたる煙にかすめり

(北海道中立牛校高二男子、八月七日・木、第一五二七号)

籠持ちて桑の葉つめる一時を夕立雨に濡れし山路

(北海道中立牛校高二女子、八月十日・日、第一五二〇号)

朝早き乙女の負ひたる青草に山百合二つさしてありけり

(山形県東根校高一男子、八月十三日・水、第一五三二号)

やうやくに耕し終へし畑のうねをふりかへりつ、汗ふきにけり

(千葉県豊岡校高一男子、八月十五日・金、第一五二四号)

家にて仕事着ぬげばみのりたる麦の穂ひとつはらりと落ちぬ

(千葉県豊岡校高一男子、八月十六日・土、第一五二五号)

一日の仕事終りて夕食の箸とる時の心のしも

(岩手県小国校六年女子、八月二十三日・土、第一五三二号)

うららかな夏の朝風身にあびて馬の草刈る田圃のほとり

(岩手県小友校高二男子、九月二日・火、第一五三九号)

流れおつる汗をもふかず今日こそは母に負けじと草を刈るなり

(北海道月寒校高二校六年男子、九月十四日・日、第一五五〇号)

日中は勿論だが、朝に晩に、児童は家の仕事を持っていた。野に山に、児童は汗を流していたということだ。

地に青葉空に真綿のちぎれ雲光をどりて夏近づけり

(千葉県久留里校五年男子、七月十六日・水、第一四九八号)

五年生の作品である。毎度のことながら、驚かされる出来栄えだ。

もろこしの長い葉つばに風吹いてさやりく〜と夏の夕暮

(茨城県上野校高一男子、八月十七日・日、第一五二六号)

くちなしの花は真白に咲きにけりそのかたはらに茄子の花咲く

(東京市小石川区礪川校六年男子、八月二十二日・金、第一五三〇号)

共に、視線の作品だが、「もろこしの」における「さやりく〜」には、もろこしの葉の長さも吹いてくる風の程度が取り込まれている。

「くちなしの」では、真白なくちなしの花に對して、赤紫の茄子の花がおかれ色彩の妙を伝えてくる作品となっている。

雨晴れて夏空高し白雲の三つ四つ五つ流れゆくかな

(東京市渋谷区本町校五年男子、八月三日・日、第一五一四号)

兄さんのつくりし柵に美しく三つ四つ五つ朝顔の咲く

(山梨県大藤校五年男子、九月十四日・日、第一五五〇号)

「三つ四つ五つ」は、後者が前者を取り込んだものかどうかは不明。それぞれが自分の作品に必要として選んだ表現であろうが、何とも微妙だ。

仏前に両手合はせて拝す時亡き父上は我をはげます

(東京市目黒区目黒校高一男子、八月五日・火、第一五一五号)

夕ぐれの父の墓場に母ときて桔梗の花をさしにけるかな

(埼玉県浦和市第一校高一女子、九月九日・火、第一五四五号)

この二作品における父親の死亡理由は不明であるが、時局柄からは戦死ということもあろうか。

第二四半期に、下駄を題材とした、次の一首があった。

い、下駄をはいたをさな児嬉しさう下を向きく〜庭をかけ足

(千葉県大戸校六年男子、四月十一日・金、第一四一六号)

第三四半期にも、下駄を題材とした。次のような作品がある。

新しき下駄を買来て歩みみる雨上りたる庭のうれしも

(茨城県日立市会瀬校高二男子、九月十四日・日、第一五五〇号)

「い、下駄を」は、「をさな兒」を微笑ましく見つめているのが作者であったが、「新しき」では、作者本人の気持ちの内容。「い、下駄」や「新しき下駄」は、心をわくわくさせる何かがある。時代を超えた共通する感覚か。

以上、第三四半期の「短歌」作品を検討してきたが、掲載された六二作品の内、戦時下を内容とする作品は一三首で、掲載率からは約二一・〇%となり、第二四半期より約四%低くなったことになる。

また、内容的にも、第二四半期には戦死した父親が作品に詠み込まれていたが、この第三四半期では、肉親の戦死は作品には表われなかった。

その一方で、視界に現れるものは、飛行機であり、「少国民新聞」(東日版)の営業地域各地で、児童に仰ぎ見られた。

この第三四半期は、農繁期にあたり、児童にとつては、食糧増産運動と相俟って、農業労働力の不足を補う「勤労奉仕」という国策に組み入れられていた。

児童が、一家の働き手として、日々、自分の役割を果たしていたことは、児童の日常生活を題材とした作品に多くみられた。児童は、家族の中で、それぞれ務めるべき役割があった時代だった。

#### 四 昭和十六年第四四半期における「短歌」

第四四半期(十月～十二月)に掲載された「短歌」は三八首。

「戦時下における児童文化」について(その一六)

この内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、次の七首であり、掲載作品に占める掲載率は約一八・四%となる。

32 先祖より伝はり来る大白に召されし兄の祝ひ餅つく

(岩手県宮古市千徳校六年男子、十月十二日・日、第一五七三号)

33 大鳥居くゞりて行けばざくくゝと桐下駄の音心にひゞく

(栃木県吹上第一校高二男子、十月二十八日・火、第一五八六号)

34 夜間飛行あるとし聞きぬ寺山の真上にともる赤き灯火

(千葉県米沢校高二男子、十一月九日・日、第一五九七号)

35 帰還せる父に抱かれし弟は小旗ふりつつ万歳さげぶ

(新潟県巻校高二女子、十二月十二日・金、第一六二五号)

36 故郷をいく山越えて北満に兄いませりと心勇みぬ

(山形県天童校高一女子、十二月二十六日・金、第一六三七号)

37 戦へる国を想へば一粒の米といへども尊かりけり

(宮城県広瀬校高一男子、十二月二十七日・土、第一六三八号)

38 自ら力わき来ぬ皇軍の勝利の跡を地図に記して

(宮城県広瀬校高一男子、十二月二十八日・日、第一六三九号)

第三二首「先祖より」では、召集令状によって入営する「兄の祝ひ餅」を、「先祖より伝はり来る大白」で掲ぐというもの。召集令状は、「おめでとう」といって渡される名誉あることとされていた。

第三三首「大鳥居」は、出征兵士の武運長久を祈るための神社への参拝。

第三四首「夜間飛行」は、文字通り、夜間の飛行訓練。第三四半期、昼間、児童の上を飛行機が飛び回っていたが、夜間にも飛ぶ飛行機のために、小高い山頂に目印の「赤き灯火」を灯したということ。

第三五首「帰還せる」は、第三二首とは反対に、戦場からの帰還兵ということ。弟の万歳は、一家の万歳ということ。

第三六首「故郷を」では、「北満に兄いませり」と、「心勇みぬ」と

するもの。兄がいるところは、満蒙開拓団であろうか。作者が心を勇ませる背景が明らかではないが、少女の心に何かの決意があったということ。

第三七首「戦へる」と第三八首「自ら」は、同じ作者。

第三七首では、戦時下において、「一粒の米」をも無駄にしてはならないとの決意。

第三八首では、連日の「皇軍の勝利の跡」を地図に書き込んで、「皇軍の勝利」を確認することで、力が湧いてくるというもの。掲載日から推測するに、十二月八日の大東亜戦争の開始後の勝利を記しているということか。

第四四半期の「短歌」作品の掲載は、三八作品。その内、戦時下を内容とする作品は七首（約一八・四％）であり、残りの三二作品は、児童の日常生活を内容とする作品であった。

庭先の草むらで鳴くこほろぎの声ほそくと聞えるなり

（栃木県小野寺南校六年女子、十月四日・土、第一五六七号）

さわやかに青く澄みたる秋空に一きわ高く薫るもくせい

（栃木県熱田校高二女子、十月二十一日・火、第一五八〇号）

さやくと夕風ふけば前島のたうもろこしの葉音きこゆる

（山梨県村山校六年女子、十一月九日・日、第一五九七号）

ろろり火を赤くたきつ、芋を焼けばほのかににほふ冬のひと、き

（宮城県白石校高一女子、十二月二十四日・水、第一六三五号）

選んだ作品が、偶然にも女子児童の作品のみとなったが、「庭先の」では、うるさいほどしきりに鳴いていた「こほろぎ」だが、晩秋の今、その声は「ほそく」であり、移って行く季節を聴覚で捉えてみせた。

「さわやかに」では、「青く澄みたる秋空」と、天高く澄渡った秋の空を視覚的に捉えるとともに、「一きわ高く薫るもくせい」と、「もくせい」が高く薫る秋を嗅覚で捉えている。

「さやくと」の作品は、第三四半期の作品「もろこしの長い葉っぱに風吹いてさやりくと夏の夕暮」（茨城県上野校高一男子、八月十七日・日、第一五二六号）の「さやりくと」聞えていた「もろこし」の葉が枯れて、夕風に「葉音」がかさかさとなるのが聞えるというもの。季節を聴覚で捉えて見せた作品だ。

「ろろり火を」は、赤く燃えている囲炉裏火と灰に埋めてある芋が焼ける匂いで表現した、視覚と嗅覚による冬の作品だ。

児童たちは、季節の移り変わりを五感豊かに表現して見せたということになる。

風呂をたく松の木のうすき火明かりをたよりに明日の考査にそなふ

（北海道美国校高二女子、十二月二十四日・木、第一六三五号）

いつの世も、児童は「考査」で大変だ。風呂焚きの薄明かりに透かして、明日の備えに余念が無い。

以上、第四四半期を検討してきたが、戦時下を内容とする作品では、第三四半期と同様、第二四半期に見られた投稿児童の肉親の戦死を内容とする作品はみられない。入営する兄がいる一方で、帰還した父がいた。「北満」には、兄がおり、「皇軍の勝利の跡」を地図に書き込む児童がいたが、戦時下色のある作品の掲載率は、約一八・四％であり、昭和十六年で最も低い掲載率となった。

十二月八日が真珠湾攻撃であったが、こうした「大東亜戦争」勃発によると思われる作品は、唯一、「皇軍の勝利の跡を地図に記して」とするもののみであった。

戦時下を内容としない作品にあつては、児童は身の回りの事象を、五感によって捉え、感性を通して言語化し、表現していたことは、第一、二、三四半期と同様であった。

## 五 昭和十六年「短歌」作品の概括

昭和十六年に掲載された「短歌」一六六作品のうち、作品内容に「戦時下」色に見えるのは三八作品(約二二・九%)。

この三八作品を、内容から、グループ化してみると、次のようになる。

○召集令状を受取って肉親や地域の人が入営することを内容とするものは、次の七作品。

第一四半期・第一首「令状を」、第二首「大君に」、

第六首「つはものが」、第一〇首「日の丸を」

第二四半期・第一五首「そのあした」

第三四半期・第三首「出征の」

第四四半期・第三二首「先祖より」

○飛行機を内容とする作品は、次の六作品。

第一四半期・第九首「高々と」

第三四半期・第一九首「ま、ごとに」、第二〇首「風やんで」、

第二五首「プロペラの」、第二八首「こゝろよき」

第四四半期・第三四首「夜間飛行」

○勤労奉仕を内容とする作品は、次の四作品。

第三四半期・第二一首「しとくと」、第二四首「勤労奉仕に」、

第三〇首「勤労の」、第三二首「鍬とりて」

○戦地や満洲に肉親がいるのは、次の三作品。

第二四半期・第一六首「火の気なき」、第一八首「戦地征く」

第四四半期・第三六首「故郷を」

○戦地からの「軍事便」が届いたとする内容の作品は、次の三作品。

第一四半期・第四首「皆寝て」、第八首「戦場の」、

第二二首「戦地から」

○恩師の戦死など戦死を容とする作品は、次の二作品。

第二四半期・第一四首「君のため」

第三四半期・第二九首「故郷の」

○慰問文・慰問品を送ることを内容とする作品は、次の二作品。

第一四半期・第五「便り書く」、第七首「満洲の」

○教室の地図や皇軍の勝利を地図に記す内容の作品は、次の二作品。

第三四半期・第二七首「歌できぬ」

第四四半期・第三八首「自ら」

○父が戦死しているのは、次の二作品。

第二四半期・第一七首「神国に」

○肉親の戦地からの帰還を内容とする作品は、次の二作品。

第四四半期・第三五首「帰還せる」

○遺品展に関する作品は、次の二作品。

第一四半期・第一三首「遺品展」

○軍馬の出征は、次の二作品。

第三四半期・第二二首「わが村を」

○茶殻の献納を内容とする作品は、次の二作品。

第三四半期・第二六首「乾してある」

○神社への参拝を内容とする作品は、次の二作品。

第四四半期・第三三首「大鳥居」

○一粒の米も尊いとす心構えを内容とする作品は、次の二作品。

第四四半期・第三七首「戦へる」

以上を整理すると、以下のようになる。

- 1 召集令状を受取って肉親や地域の人が入営することを内容とするものは、七作品。
- 2 飛行機を内容とする作品は、六作品。
- 3 勤労奉仕を内容とする作品は、四作品。
- 4 戦地や満洲に肉親がいるのは、三作品。

- 5 戦地からの「軍事便」が届いたとする内容の作品は、三作品。
- 6 恩師の戦死など戦死を容とする作品は、二作品。
- 7 慰問文・慰問品を送ることを内容とする作品は、二作品。
- 8 教室の地図や皇軍の勝利を地図に記す内容の作品は、二作品。
- 9 父が戦死しているのは、一作品。
- 10 肉親の戦地からの帰還を内容とする作品は、一作品。
- 11 遺品展に関する作品は、一作品
- 12 軍馬の出征は、一作品。
- 13 茶殻の献納を内容とする作品は、一作品
- 14 神社への参拝を内容とする作品は、一作品。
- 15 一粒の米も尊いとする心構えを内容とする作品は、一作品。

さらに、次のようにグループ化してみると、以下のようなになる。

〈児童が軍隊と直接・間接に係わっている作品〉

- 1、4、5、6、7、9、10、11、12の一九作品。

〈児童の放課後に係わる作品〉

- 2の飛行機を見上げる作品など、六作品。

〈児童が勤労奉仕・食糧増産に係わっている作品〉

- 3の勤労奉仕を内容とする四作品。

〈児童が学校生活において「戦時下」にある作品〉

- 8の教室に「東亜の地図」があったり、「皇軍の勝利」を地図に記すという二作品。

〈児童と地域社会に係わる作品〉

- 13の茶殻の献納、14の神社への参拝など二作品。

つまり、昭和十六年の「短歌」においての「戦時下」色を持つ作品では、児童が軍隊と直接・間接に係わっている作品が五〇%以上になるとなる。

(二〇一〇・一一・二九)